新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS

第 16 回新藤兼人賞

2011 年 12 月 2 日（金）東京會舘 11 階　ゴールドルーム

主催：　協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：　松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／株式会社角川書店

コダック株式会社／株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ／株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

金　賞

塙 幸成『死にゆく妻との旅路』監督

受賞者プロフィール　1965 年、神奈川県生まれ。高校在学中より映画業界で働き始め、にっかつロマンポルノ末期よりフリーの助監督として、曽根中生、田中登、小沼勝、中原俊、林海象らの下で研鑽を積む。96 年「tokyo skin」で長編デビュー。同作は、第１０回福岡アジア国際映画祭にて審査員特別賞を受賞、チェン・カイコーらからも絶賛されたほか、ロッテルダム国際映画祭など１０カ国の国際映画祭で上映された。99 年より文化庁の芸術文化在外研修制度を利用してオーストラリアに留学。帰国後撮影した長編第２作目は、３億円事件を描いた「初恋」（06）、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、カイロ国際映画祭など約１０カ国の国際映画祭で上映された。

銀賞

近藤明男『エクレール・お菓子放浪記』監督

受賞者プロフィール　1947 年、東京生まれ。70 年、早稲田大学教育学部を卒業後、大映に入社。増村保造や市川崑らの助監督としてキャリアをスタートさせる。後にフリーランスのチーフ助監督として、増村作品『大地の子守歌』（76）、『曽根崎心中』（78）、『この子の七つのお祝いに』（82）、市川崑作品『ビルマの竪琴』（85）などに参加。95 年、日仏合作『想い出を売る店』で監督デビュー。監督第２作『ふみ子の海』（07）は、ホール自主上映を中心に上映が続けられ、封切後３年を越える異例のロングランとなっている。特に東北地方では動員１２万人以上を超える大ヒットとなった。同作で第２４回山路ふみ子映画賞　福祉賞を受賞。

ＳＡＲＶＨ

プロデューサー賞

新藤次郎『一枚のハガキ』製作・プロデューサー

受賞者プロフィール

1949 年生まれ、神奈川県出身。71 年日本大学芸術学部写真学科卒業。在学中より新藤兼人作品中心に独立プロのスチールを担当。79 年から三船プロダクションにて「大江戸捜査網」（テレビ東京）のプロデューサーを担当。　86 年「ブラックボード」から近代映画協会にてプロデューサー、現在に至る。
株式会社近代映画協会　代表取締役社長　／　協同組合日本映画製作者協会　代表理事

主な作品：「墨東綺譚」「午後の遺言状」「生きたい」「三文役者」「ふくろう」「サヨナラ COLOR」「転がれ！たま子」「石内尋常高等小学校　花は散れども」「一枚のハガキ」等

審　査　員　講　評

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：桝井省志（アルタミラピクチャーズ）

本年度の新人監督作品は１３２本，　この数年毎年のように新人監督の数が増えています。そのうちドキュメンタリー作品は３１本、ドキュメンタリー作品の増加も顕著となっています。撮影、編集、上映機材の進歩が多くの新人監督を比較的容易に世に輩出するのを可能にしているとも思われますが、多くの若い作家が自己のみずみずしい作品を世に問いやすくなったことは喜ばしいことです。しかし、本年度の受賞監督お二人は、奇しくも助監督という仕事経験を通して、映画のプロの製作現場を支えてきた経歴の持ち主です。だからでしょうか？　両監督の作品に共通して言えるのは、饒舌ではないが繊細で丁寧な作品作りの姿勢です。そんな両監督の授賞を心から祝福したいと思います。
金賞『死にゆく妻との旅路』の塙幸成監督は、落ち着いた丁寧な演出で、美しく厳しい日本の四季の移ろいと美しい妻の病状の移ろい、夫婦の生き様の移ろいを静かに時に激しく映像で示し、究極の愛を描き切りました。死に行く妻の最後の吐息がふと聞こえてきたような、また、釈放されてきて泣き叫ぶ夫が雪の落ちてくる空に目を見開いた瞬間見た物が何であったかを我々に問うような演出が印象的でした。しかも同時に、失業・格差・終末医療・尊厳死といった現代が抱えこんだ切実な問題が、リアルに我々に迫ってきます。このような社会性のある企画は、映画のテーマ

として重要でありますが、商業映画として実現することの難しさを乗り越え秀作を作り上げたスタッフ、キャストに改めて敬意を表します。
銀賞『エクレール お菓子放浪記』の近藤明男監督は助監督として素晴らしい数多くの作品に携わった経歴をもちながら、監督としてはやっと3本目の作品だというのが今の映画界の矛盾というか実情でもあります。ともすると、ベテランということが却ってハンデになる昨今の映画業界ですが、それを感じさせない初々しく爽やかで好感の持てる作品を作り上げました。戦時下の話をコンパクトにまとめ、一気に見せきった手腕をかいます。戦後が遠のく現代に於いて、戦時の物語を描くことが極めて難しい時代になってきたことを痛感する今、まだまだこの時代を描くことが可能であり、大切な仕事であることを再認識することができました。相変わらず、邦画の制作現場は厳しい環境に置かれていますが、この二作品の監督、スタッフ、俳優陣のチームワークで映画を完成し公開させた熱意に、同じ製作者として勇気づけられます。
最後に、最終選考に候補として挙げられた『モテキ』の大根仁監督は、二作目が楽しみです。『まほろ駅前多田便利軒』の大森立嗣監督には既に前作でも高い評価を得ていますが、今後の更なる活躍に期待します。また、ドキュメンタリー作品としては、坂田雅子監督の『沈黙の春を生きて』、松永大司監督の『ピュ～ぴる』など個性豊かな作品の名前が上がりました。

利倉 亮（レジェンドピクチャーズ）
30年ほど前、京都の撮影所で時代劇シリーズなどの仕事していたときに、「への5番」「みなまで言うな」という言葉があったことを思い出します。 テレビのドラマ制作が盛んな時代でした。 オールスタッフのうち合わせが、30分で終わることも多々ありました。 それでも、責任のある準備ができていました。いつも変わり映えしない台本とキャスト、スタッフでのロケ現場でしたが、それなりに、こだわりのある作品を制作していました。 メインスタッフになるには長く下積みの期間を経験します。撮影・照明・録音・美術・衣装・メイクなど、どのパートも同じです。映画制作は、夢をみたり現実をみたりしながら、結果を出していかなければなりません。機材がとてもコンパクトで性能も良くなり、低予算で安易に映像制作が出来るようになったことと、劇場・DVD・配信など、色々な媒体が速いスピードで変化している今、あらためて現場の経験値の高さが必要とされると思います。
「死にゆく妻との旅路」「エクレール　お菓子放浪記」の2作は、それぞれの監督の豊富な経験が生み出した良い作品です。

山上徹二郎（シグロ）
『死にゆく妻との旅路』の塙幸成監督も『エクレール・お菓子放浪記』の近藤明男監督も、ともに今回が3作目での受賞ということで、新人賞としてラストチャンスだったのだが、お二人とも経験的にはベテランといってよく、映画の現場から出てきた監督であるお二人のような方が受賞するのは、新藤兼人賞らしい意義深いものだと思う。この2作品については、多少物足りなさも感じたが、今年の作品の中では順当な選考になったのではないか。
『死にゆく妻との旅路』は、その題名とロードムービーの展開から結末が見えていて、映画としての本質的な意味でのサスペンス＝物語をけん引していく構成力＝の弱さに、若干不満が残った。脚本の段階からの問題かもしれないが、加えて、原作がある場合の、映画化におけるタイトルの選定の難しさについて、私自身改めて考えさせられるところがあった。
『エクレール・お菓子放浪記』は、おそらく潤沢ではない製作予算だったからこその思い切った演出的飛躍があり、それがこの作品の意外性を保証していると思う。また、大手のテレビ局や配給会社が入った製作委員会とは異なる、全員参加型のような製作委員会方式の本領発揮も面白いと思った。
今年は昨年に比べて、ドキュメンタリー映画の製作本数が増えた。中には一定の興行的な成功を収めている作品もあり、ドキュメンタリーへの注目が集まっているように思う。3月11日の大震災と福島原発事故による影響が、社会的な空気感のようなものとして、背景にあるのではないかと想像している。また、家族の問題や自分自身のことなど周囲の狭い範囲をテーマにしたものが多く、映画表現としての普遍性にまで届いていない作品が、増えているように

思う。製作費の低予算化とともに、テーマ自体も閉じていく方向に向かっているのではないか。最近の若い作家たちの傾向を少し心配している。

SARVH　プロデューサー賞選考委員講評

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）日本映画製作者協会 副理事長

今年の SARVH 賞選考は全員の一致で新藤次郎さんに決まりました。
思えば日本の独立映画製作会社の先駆として近代映画協会の残して来られた業績は、日本映画の黄金期から低迷期を経て現在にいたる私たち独立映画製作者の道しるべとでも呼ぶべきものでした。
その活動は新藤兼人監督を中心としてはじまり、その後、新藤次郎氏によってひきつがれ数多くの作品を発表しておられますが、今年は特に「一枚のハガキ」で素晴らしい結実を示された努力に敬意を表した結果です。
氏は今回の選考結果について、いささか消極的でした。おそらくご自分が代表理事を務めておられる日本映画製作者協会が選考する賞だからでしょう。しかし私たちは、製作プロダクションとしてこれだけの名作を作り続けられ、「一枚のハガキ」という見事な成果を得られたプロデューサーを私たちの仲間から選びだすことができたことを喜び、誇りに感じています。それとともに今後とも独立系映画製作者の旗印として活動を展開していただけるよう期待しております。